

第5回白壁賞は幕内博康氏らが、 第24回村上記念「胃と腸」賞は 勝又伴栄氏らが受賞



Fig. 1 第5回白壁賞を受賞した幕内博康氏.



Fig. 2 八尾恒良氏(左)から幕内氏(右)に賞状が授与された.



Fig. 3 多数の参加者で埋まった広島厚生年金会館大ホール.

10月27日(水), 広島厚生年金会館大ホールで行われた第39回「胃と腸」大会の席上, 第5回白壁賞と第24回村上記念「胃と腸」賞の授賞式が行われた. 第5回白壁賞は幕内博康・他「 $m_3 \cdot sm_1$ 食道癌に対する EMR の可能性」(胃と腸 33: 993-1002, 1998)に, 第24回村上記念「胃と腸」賞は勝又伴栄・他「潰瘍性大腸炎にみられる敷石様所見の臨床病理学的検討」(胃と腸 33: 1243-1253, 1998)に贈られた.

司会の岡崎幸紀氏(周東総合病院内科)から, まず白壁賞受賞者の発表があり, 幕内氏(東海大学外科)が紹介された. 白壁賞は故・白壁彦夫氏の偉業を讃えて, 消化管の形態診断学の進歩と普及に寄与した論文に贈られるもので, 「胃と腸」に掲載された論文に加え, 応募のあった論文も選考対象となる. 今回は「胃と腸」33巻に掲載された全論文と, 応募1篇・編集委員推薦1篇が選考対象となった.

選考委員を代表して, 下田忠和氏(国立がんセンター中央病院臨床検査部)が選考経過を説明し, “本論文は, $m_3 \cdot sm_1$ 食道癌に対する EMR の可能性を, 徹底的に追求している. 術前に sm に深く入っている可能性が診断ができる $0-IIc+IIa$, $0-III$ や $0-I$ を除外し, また大きさの大きいものは手技的な問題から除外したうえで, そのほかの $m_3 \cdot sm_1$ 症例を検討している. リンパ管侵襲がなく, 低分化成分がなく, 更に癌の浸潤が圧排性の増殖をしているものはほぼ100%リンパ節転移がなく, そうしたものに $m_3 \cdot sm_1$ 食道癌の49.5%が相当すると報告している. 最近臨床診断で十分に深達度診断が行われるようになってきたことも踏まえて, $m_3 \cdot sm_1$ で EMR が可能であるものが多く, 侵襲の少ない治療法として期待できると示したことが評価された”と述べた.

続いて, 早期胃癌研究会代表の八尾恒良氏(福岡大学筑紫病院消化器科)から, “白壁先生は「胃と腸」が現在まで脈々と35年間にわたって存続していることに, 最も功績のあった先生. 今日先生の在りし日のにこやかながら厳しい態度が思い出される. この度の幕内先生は, ふさわしい賞を得られたと思う”との祝辞の後, 賞状と賞牌が授与された. 引き続き, 医学書院からは賞金50万円が贈呈された.

受賞者を代表して, 幕内氏は, “敬愛する白壁先生の

お名前を拝した栄誉ある賞をいただき、選考委員の先生方、編集委員の先生方に日ごろのご指導を心から感謝申し上げます。医局の先生たち、いろいろ手助けしてくださった方々、皆でこの受賞を喜びたい。と同時に、今回の仕事は、われわれだけではなく、食道グループの先輩、同輩あるいは後輩の先生方の、すべての結晶であると思う。いつかは食道領域で白壁賞をもらってみたいと思っていたが、今回思いもかけず早く受賞することができた。ここ数年来で最もうれしいことの1つである”と感謝の言葉を述べ、満場の拍手を受けた。

続いて、第24回村上記念「胃と腸」賞の受賞者が発表され、勝又氏(北里大学東病院消化器内科)が紹介された。本賞は故・村上忠重氏の偉業を讀えて、消化器、特に消化管疾患の病態解明に寄与した論文に贈られるもので、「胃と腸」33巻に掲載された全論文の中から選ばれた。

選考委員を代表して、下田氏は選考経過を説明し、“本論文は、潰瘍性大腸炎において敷石様所見を呈するものが約11%に認められ、左側大腸に高頻度にみられ、その多くは軽症例ではなく重症例において多くみられるが、なぜそういうものが起こってくるかという病理学的な解析を加えた論文である。潰瘍性大腸炎における敷石様所見を呈するものは、頻度は少ないが、臨床的にこのようなものを知って置いて、Crohn病やその他の炎症性腸疾患と十分鑑別をしなければいけないという論点が評価された”と述べた。

八尾氏は、祝辞の中で、“村上先生は「胃と腸」の産みの親であり、「胃と腸」病学の開祖と言ってもよい先生で、臨床病理学的な、臨床に合わせた病理の見方を教えてくださった。先生の書かれた「胃と腸」創刊号の大変すばらしい総説を、機会があったら皆さんお読みください”と述べ、賞状と賞牌の授与を行った。医学書院からは賞金50万円が贈呈された。

受賞者を代表して勝又氏は、“選んでいただいた編集委員の先生をはじめ、一緒に仕事をした諸兄にも厚くお礼を言いたい。全く予想もしていなかったこの賞をいただくことになり、青天の霹靂と言うか、最初は夢ではないかと信じられなかった。日ごろから、形態診断学をしていて気をつけていることは、画像診断が臨床的にどんな意義があるかということはもちろんだが、必ず肉眼的な変化が、病理組織学的な変化に対応するだろうという信念のもとに、画像なり肉眼所見を見るように心掛けている。これは「胃と腸」の最初からの手法を学ばせてもらって、しているわけで、今後もずっとこの方法を続けて



Fig. 4 第24回村上記念「胃と腸」賞を受賞した勝又伴栄氏。



Fig. 5 八尾氏(左)から勝又氏(中央)に賞状が授与された。

いきたい。もう1つ、複雑な現象をできるだけ単純化できないかと考え、形態診断学も非常に複雑に見えることが多々あるけれども、発生から成長の過程でいろいろ変化しても、その成り立ちのようなもの、本質的なものは、それほどたくさんはないだろうという考えのもとに、できるだけシンプルな分類と、その形態のストレートな表現法を常に意識をしている。全く思いもかけない賞をいただいたが、できればV2をめざして、今度は意図的にチャレンジしてみようかと思う”と挨拶し、盛大な拍手を受けた。